

平成21年5月19日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18529002  
 研究課題名（和文） ドイツ宗教学の歴史における宗教・政治的イデオロギー・学問の相関関係  
 研究課題名（英文） Interactions between religion, political ideologies, and academe in the history of the study of religions in Germany  
 研究代表者  
 久保田 浩（KUBOTA HIROSHI）  
 立教大学・文学部・准教授  
 研究者番号：60434205

## 研究成果の概要：

従来、「宗教学」の学説史においては、「宗教学」は自らを「神学から解放」しつつ「客観的学問」として成立してきたと記述されてきた。しかし「学問」として「宗教」を語るという営為は、その都度の政治的・文化的・宗教的文脈の中で、特定の宗教的・政治的実践性を伴ってきた。本研究課題において、特に19世紀末以降のドイツにおける「宗教学」の展開が「宗教学的宗教性」と呼び得るような性格を有しつつ、時代の政治状況との密接な関わりの中で展開してきたことが明らかにされた。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	360,000	2,560,000

## 研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：宗教学、学問史、宗教史、自由主義神学、ドイツ史、プロテスタンティズム、宗教現象学、民族主義的宗教学

## 1. 研究開始当初の背景

従来の近代ドイツ宗教史記述は、ローマ・カトリック教会とプロテスタント教会を両軸とする「教会史」という歴史記述枠組みを越え出しておらず、これらの制度化（政治体制化）した宗教への批判を出発点とした諸宗教運動が顧慮されることは少なかった。本研究を開始した動機のひとつは、制度化した既存の「キリスト教」を暗黙の前提とする歴史記述に対し、その問題点を指摘しつつ新たな宗

教史記述の可能性を探ることにあつた。しかし、ドイツのみならず西洋世界の学問的發展において、「宗教」を「学問的に」語るという営為の担い手は、基本的に「神学」という理解が存在してきた。そこで本研究代表者は、「非神学的宗教研究」を構想する際に不可欠な基礎作業となるのが、こうした「宗教研究」と「神学」との歴史的相関関係であるとの認識に至った。また、本研究の遂

行へと促されたもうひとつの背景は、ドイツ「宗教学」の学説史において、「宗教学」を啓蒙合理主義的なイデオロギー批判の系譜に位置付けようとする動きがしばしば見られることであった。そうした「宗教学」理解によれば、「宗教学」は既に20世紀の初頭に「神学」から解放された一学問領域として確立しつつあったという。けれども、帝政期からヴァイマル期、そしてナチズム期にかけて形成され、1945年以降世界的に影響を及ぼすこととなるドイツ「宗教学」の原型が、従来の学説史が述べるような啓蒙合理主義以来の単直線的な展開を辿ってきたのかという点に関して、特に当時の宗教史的事情を研究する者として大きな疑念を抱いていた。また逆に、別の学説史的記述の伝統は、この時期に形成されていった「宗教学」の系譜を19世紀初頭のロマン主義に見出し、「宗教学」の非合理的性格を糾弾してきた。しかしこうした方向性も一般的な観念史の流れを追うに留まり、「宗教学」の「非合理主義」なるものの実態が明らかにされているわけではないように思われた。そこで、本課題研究において、ドイツにおいて19世紀後半から20世紀初頭にかけて一学問分野として明瞭な形を整えていくことになる「宗教学」の具体的な宗教史的・文教政策的・学問史的な文脈を再検討すること（学問史的自己反省）を課題として設定し、以上のような疑問に答えることを試みた。

## 2. 研究の目的

ドイツにおける「宗教学」「宗教研究」という学的営為の歴史（その成立・展開・普及・確立過程）を、宗教史的文脈（キリスト教会、非キリスト教的・反キリスト教的諸宗教運動、非宗教的精神・社会運動）、政治的文脈（政治的イデオロギー、文教政策、宗教政策）、学問制度史的文脈（「宗教学」「宗教研究」の制度化）において再考する。理論内面的、方法論的・理論的な「学説史」ではなく、知識社会学的な視点から「宗教学」を文脈化し、認識主体（「宗教学者」）と認識対象（「宗教」）との相互作用を解明すること、「宗教」について語り、語られる公の場の成立（特に、「宗教学」の制度化）がはらむ政治性・宗教性を明らかにすることが目指される。そのために、帝政、民主主義、ファシズムへと変遷していく近代ドイツの政治体制の中で為政者の側

から「宗教学」に要求された政治的役割、そして社会内で「宗教学」に期待された宗教的・文化的役割、それに対する「宗教学」側からの政治的・社会的自己正当化の言説、文教政策・文化政策的に深く関与したプロテスタント自由主義神学と「宗教学」との関連（「神学」言説と「宗教学」言説との競合関係）、非キリスト教的・非神学的な知識人の宗教性（「非キリスト教的」ではあるが「宗教的」であり続けようとする「知識人の宗教」としての「宗教学」の性格）、ファシズム期の「宗教学」の政治的イデオロギー化過程（「民族主義的宗教学」の確立過程）、これらに着目して考察を進めていく。

## 3. 研究の方法

以上の問題設定に則した研究を遂行するために、史料の所在の解明、史料蒐集及びその分析・検討が主となる研究方法となった。詳細は以下の通りである。

(1) 「宗教学」関連辞典類の成立史に関する史料の蒐集及び検討。特に、後に宗教学・神学研究の標準的辞典となる *Die Religion in Geschichte und Gegenwart* 第一版（1909年以降）の成立事情解明のため、ドイツ連邦文書館、ゲッティンゲン大学文書館、チュービンゲン大学文書館、モーア・ジーベック出版社文書館等で調査を遂行した。

(2) 「宗教学」の学問史、特に、所謂「宗教史学派」及び「民族主義的宗教学」の成立・展開史に関する刊行資料並びに未刊行史料の蒐集及び分析を行なった（チュービンゲン大学比較宗教学研究所所蔵史料、ゲッティンゲンの宗教史学派資料館等）。

(3) 「宗教学」関連雑誌の分析及びその成立事情に関する史料の蒐集及び検討。特に、ドイツ「宗教学」の揺籃期の状況に関する情報を含む以下の三つの学術雑誌を詳細に検討した。プロテスタント自由主義神学の宣教団体を出自とする『宣教研究及び宗教学雑誌』 *Zeitschrift für Missionskunde und Religionswissenschaft* (1886ff.)、歴史的・文献学的宗教研究の最初の雑誌である『宗教学 アルヒーフ』 *Archiv für Religionswissenschaft* (1898ff.)、ローマ・カトリック的立場からの宗教研究誌『宣教及び宗教学雑誌』 *Zeitschrift für Missionswissenschaft und Religionswissenschaft* (1928ff.)（テュー

ビンゲン大学図書館、プファルツ州福音主義教会文書館、モーア・ジーベック出版社文書館)。

以上は主に一次史料の蒐集と分析であるが、以下については、刊行資料に基づく歴史的な文脈の再構成を主たる方法とした。

(4) 歴史的に形成されてきた形態での「宗教学」の成立を可能とした宗教史的な文脈に関する研究状況の把握の為、以下の主題に関する刊行資料を分析した。

①プロテスタント自由主義神学的思想が社会における学問観・宗教観として共有されていった過程、②社会の脱教会化に伴う、近代的学問観の台頭、学問としての神学批判、非キリスト教的宗教運動の展開、非キリスト教的宗教への学問的関心、これらの間の相関関係。③20世紀に入ってから顕著になってきた、「宗教学」と「神学」との外面的分離を促した宗教的・政治的文脈(特に、領邦教会制度が崩壊し、宗教的にも民主化が進んだヴァイマル期、社会全体の非キリスト教化が図られたナチズム期)。

以上の文書史料に基づく調査のほかに、本報告書末尾に記す海外研究協力者と共に共同研究を遂行し、意見を交換し、また情報提供等を得た。

#### 4. 研究成果

本研究課題の成果としては何よりも、従来の学説史記述に対していくつかの批判的視点を提供したことが挙げられる。「宗教学」なる営み及び制度の歴史を知識社会的観点から分析し、従来の学説史で描かれていたような観念的学説史(諸宗教理論、方法論の成立、それらの間の影響関係、理論的・方法的妥当性の検証に関する記述)では捉えきれない多角的な「学問史」記述の可能性(「学問」「宗教学」なるものの社会的な位置、政治的有用性、「宗教」形成力、宗教的実践性等々を解明する視点)を提示した。こうした「学問史」はドイツにおいても漸く1990年代から次第に現れてきた傾向であり、未だ十分に研究されていない領域である。ドイツにおいては特にナチズム期の「宗教学」に視点が向けられ、その時期の「宗教学」の政治的有用性に関しては多く語られるようになってきたが、19世紀後半から1933年に至るまでの「宗教学」の「学問史」は、若干の例外を除いては現在に至るまで学説史を中心と

した研究に留まっている。また日本においても、「宗教学」の自己反省作業としては学説史が主流である。確かに西洋においても日本においても「宗教学」の自己反省作業は、殊にポストコロニアル的な「学問知」批判を経て促進されてはいるものの、個別具体的な歴史的な文脈の分析に基づく「宗教学知」の成立と制度化の解明作業という意味では、決して十分な展開を見せているとは言いがたい。こうした現状から見て、本研究で示されたような、これまでの「宗教学」の自己理解への批判的視差しに基づく個別的歴史事象分析は、将来的「宗教学」の新たな方向性を模索するための一契機となると考えられる。本研究課題の成果としては、具体的に以下の点が挙げられる。

(1) ドイツにおける「宗教学」の宗教的実践性の解明。

19世紀末から20世紀初頭における「宗教学」の代名詞的存在であった「宗教史学派」、「宗教現象学」の持つ、学問外的・精神史的・宗教的実践性、及び「宗教学」の宗派性を史料に基づき明らかにした。「宗教史学派」に関して述べれば、ドイツプロテスタンティズムないしはドイツプロテスタント神学において「自由プロテスタンティズム」或いは「文化プロテスタンティズム」と呼ばれるようになった、自由主義神学を出発点とした文化的運動は、伝統的プロテスタント神学が有する「宗教」理解を超えた新たな「宗教」理解(脱神学化した「宗教」理解)を、「宗教学」という名の下で出版物を介して社会内に浸透させようとした(「学術出版」による「布教」戦略の展開)。また、「宗教現象学」について言えば、例えばその代表的学者と目されるルドルフ・オットーとその弟子ヴィルヘルム・ハウアーが指導した「宗教的人類同盟」という宗教間対話を目指す組織、更にはハウアーが指導者になった「ドイツ信仰運動」という反教會的宗教運動体に見られるように、個別的「諸宗教」の観察に基づく抽象化の結果として構築された「宗教」観念を、逆説的ではあるが具体的な組織あるいは運動体として可視化させようとする動き(「宗教学」の「宗教」化、あるいは「宗教学的宗教性」の具現化)が顕著に見られる。また他方で、こうした構築性の強い抽象的「宗教」概念形成へと歩を進めてきた「宗教学」は、これも逆説的ではあるが、ヴァイマル期・ナチズム期を

通じて普及してきた「宗派的宗教学」と呼び得る「宗教学」理解を前提としていたという事実が認められる。具体的に表現すれば、ヴァイマル期を通して、まずプロテスタント自由主義神学の制度的生き残り戦略として「プロテスタント宗教学」が、その後、社会内での対プロテスタント神学への対抗軸として「カトリック宗教学」が、そしてナチズム期に入り、こうしたキリスト教神学的「宗教学」に対する「民族主義宗教的宗教学」が確立していった。これらは全て「宗教学」という名称を掲げており、伝統的な学説史が説く「神学からの解放」という歴史解釈的枠組みの仮構性が明らかとなった。

(2) ドイツにおける「宗教学」の政治的・宗教政治的実践性の解明。

特にナチズム期において、「宗教学」に期待された政治的・社会的役割に対して、「宗教学」側が展開した自己正当化の言説（自らの政治的・社会的有用性を説く言説）を分析した。まず、ナチズム期ドイツにおいて、日本宗教史の研究者等が援用した、「一民族一宗教」という言説（「日本民族に生得的に備わっている単数形の宗教的精神性」、という語り方）が、当時、ゲルマン宗教史研究者の間で、並びにプロテスタント教会内部のいわゆる「ドイツ的キリスト者」運動において普及していた、「ドイツ民族（人種）に相応しい宗教」「ドイツ民族に相応しいキリスト教」という言説を受容した形での言説形成の帰結であったことが確認される。このように、当時の宗教史家の一部は、彼等がナチ政権の宗教政策的立場であると看做した「一民族一宗教」という前提を受容することにより、それに基づく宗教史記述を展開していった。また、(1) で言及した「民族主義宗教的宗教学」も、ナチ政権の反キリスト教的宗教政策、例えば、高等教育制度からのキリスト教神学の排除を目指す文教政策に則した形で、実質的にはキリスト教神学であり続けた「プロテスタント宗教学」や「カトリック宗教学」に対する一種の「対抗神学」として構築されていたものであると捉えられる。つまり、政権側に見れば、このようにしてキリスト教神学の社会的影響力の排除のための制度が「宗教学」の制度的確立によって期待されており、逆に「民族主義宗教的宗教学」はそうした文教政策に積極的に応じることによって、「ドイツ民族に相応しい宗教」のいわ

ば「教義学」を提供する役割を自らに負わせることになった。こうした事例が示していることは、戦後に世界的に名を馳せることになった「ドイツ宗教学」の負の遺産が、これまでの学説史においては等閑に付されていた、あるいは、少なくとも少数派の非主流的存在であったとして過小評価されていたということである。

(3) 1945年以前の「宗教学」と戦後の極右思想との連関の解明。

現在に至るまで活動している「ネオナチ出版社」のひとつであるグラーベルト出版社の成立が、戦前の「ドイツ宗教学」の諸傾向（自由主義プロテスタンティズム及び「民族主義宗教的宗教学」）と密接に関連していることを明らかにした。この出版社の創設者であるヘルベルト・グラーベルト及びグラーベルトの学問的・宗教的師であるヴィルヘルム・ハウアーの「民族主義宗教的宗教学」の思想的根幹には、自由主義プロテスタント的発想（反教権主義、反ドグマ主義）と単一的な民族宗教性（「民族共同体」を成立せしめる単一の宗教性）の仮定とが共存していること、そしてそれらが戦後になって、「自由な」（戦前には、「反キリスト教的」「ユダヤ的なキリスト教から解放された」という言語使用がなされていた）そして「ヨーロッパ的な」（同じく戦前には、「ドイツ的な」「アリア的な」）「宗教」の追求へと語用論的に変化していったこと、そして最終的に、戦後ドイツの政治的極右思想・運動の中での中心的イデオロギーとしての機能を果たすようになっていったことを示した。これまで、戦前の「ドイツ宗教学」と戦後のネオナチ運動との間の連関について語られることは殆どなかったが、こうした研究により、戦前の「宗教学」が有していた潜在的影響力の一部が解明されることとなった。

以上のような学説史・学問史の書き換え作業は、「宗教学」なる営みを「宗教史」の一現象として捉える視点を提供してくれる。その意味で、これからの宗教研究において、19世紀以降に「学問」という名称の下で「宗教」について語るという営みの総体を、狭義の「宗教学」に限定することなく、時代的文脈の中で考察していくことにより、より包括的な宗教史記述の可能性が開かれると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2件)

1) 久保田浩、「近代ドイツ宗教史の一断面—「キリスト教」の多層性を巡って」、『キリスト教学』(査読有)、第50号、2008、77-87頁。

2) 久保田浩、「「キリスト教学」という狭間、そしてその可能性」、『キリスト教学』(査読有)、第48号、2006年、181-202頁。

[学会発表] (計 4件)

1) 久保田浩、「「ドイツ信仰運動」—近代ドイツにおける一宗教の成立を巡って—」、日本宗教学会、2008年9月14日、筑波大学。

2) 久保田浩、「「知識人宗教」の「布教」戦略—宗教運動としての宗教史学派—」、日本宗教学会、2007年9月16日、立正大学。

3) 久保田浩、「非キリスト教的ドイツの中のオットー」、日本宗教学会、2006年9月17日、東北大学。

4) 久保田浩、「「キリスト教学」という狭間、そしてその可能性」、立教キリスト教学会、2006年6月3日、立教大学。

[図書] (計 6件)

1) 竹沢尚一郎編、水声社、『宗教とファシズム—ファシズム期の宗教と宗教研究』、2009年(刊行予定。第三章担当。掲載頁数未定)。

2) 市川裕・松村一男・渡辺和子編、リトン、『宗教史とは何か(上巻)』、2008年、63-100頁(担当章)。

3) 世界の宗教教科書プロジェクト編、大正大学出版会、『世界の宗教教科書』、2008年(DVD出版。解説論文及び翻訳担当)。

4) Horst Junginger (ed.), Brill Academic Publisher, *The Study of Religion under the Impact of Fascism*, 2007, pp. 613-634(担当章)。

5) 磯前順一、タラル・アサド編、みすず書房、『宗教を語りなおす—近代のカテゴリーの再考』、2006年、51-84頁(担当

章)。

6) 国際宗教研究所編、『現代宗教2006』、2006年、76-98頁(担当章)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久保田 浩 (KUBOTA HIROSHI)

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：60434205

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

(4) 海外研究協力者

Heinrich, Fritz

Georg-August-Universität Göttingen,

Theologische Fakultät,

Wissenschaftlicher Mitarbeiter

Junginger, Horst

Eberhard-Karls-Universität Tübingen,

Fakultät für Kulturwissenschaften,

Lehrbeauftragter

Kehrer, Günter

Eberhard-Karls-Universität Tübingen,

Fakultät für Kulturwissenschaften,

Professor

Krech, Volkhard

Ruhr Universität Bochum, Fakultät für

Evangelische Theologie, Professor